

---

# **とある男子高校生と女子高生の日常**

クロネコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある男子高校生と女子高生の日常

### 【Zコード】

Z3997BA

### 【作者名】

クロネコ

### 【あらすじ】

調子に乗ってグダグダ日常系第2弾連載開始ですーー！

まあ、滅茶苦茶なところもありますが大目に見てください。

人生は続くけど、青春は続かない。

## 第1話・学校の屋上に行つたら空からパラシュートを背負つたメガネの少女が

男子高校生と女子高生が出来つけむ。

では、一語づりやーーー！

# 第1話・学校の屋上に行つたら空からパラシュートを背負つたメガネの少女が

001

義務教育が终わり、高校へ入学して2週間が経とうとしていた。

俺は関東のある県立の高校へ通つてゐる。

本当は公立の高校へ通う予定であり、この学校は正直行きたいと思つて受かったわけではない。

中学の時の成績は、真ん中ぐらいであったが、世の中では本番で100%の力を出すのは難しいとされているが、何故か俺はこういつた場では120%と自分の力以上の力を出してしまつみたいで、受かつてしまつたつていうのが本音だ。

そして、周りからの声などもあり、「学校に通うことになつたわけだ。

2週間近くが経つて慣れてきたのは事実であり、最近は昼休みに屋上で昼寝をするのが日課みたいになつてゐる。

「あー眠てえ。5時間受けたくねえ」

春というのは何故こんなにも眠たくなるのだろう。

これで寝るなと云つ方が酷である。

怒るのであれば、日本に四季という立派なものを作つた神様に対し  
て怒つてほしい。

そう思いながら、寝そべつていた体を起こし、柵の方へ歩いていく。  
携帯を取り出し、正門から外に延びている桜並木を写めつたあと、

Twitterで呟く。

「屋上なう」

そろそろ昼休みが終わりそうだったので、嫌々重たい瞼を擦りながら、扉の方へ歩いて行つた。

「桜つてなんか切ないと思わへん?」

ん?何か声がしなかつたか?

周りを見回したが俺以外はいない。

まさか、俺が言つたのか?

春だからか?

春だからおかしな人の仲間入りでもしたのか?

「あー俺はもうダメだ」

その時、また声がした。

「何、情けない声出しどんねん」

しとんねん?

あれ?俺つていつから関西人になつたんだ?  
もしかして、実は両親が関西人だったのか!?  
いやいや、そんなわけないだろ。

両親はどちらも関東人だ。

「うーん……あ、そうだ寝ぼけているんだ。さつきまで寝ていたし  
な。うんうん」

やつ一人で言い聞かせて、また歩きだした。

「ここ加減気づけや」「ハーハー……。」

空から声がしたと思い見上げた瞬間、女の子が降ってきた。  
いや、ドロップキックをしてくる女の子であった。

「ハハハ」

地面を3回転する俺。

「何をしやがる……。」

「アンタが話を聞かんからやろ……。」

「いやいや、聞くも何も周りに誰もいなかつたし」

「おひたわー……。」

「ビーンズ。」

「あー」

そう言いながら、入口の屋根を指す。

「んなとこわかるわけないだろ」

「ちよっと見上げたらわかるやん」

「悪いな。俺は前しか見てないんだよ」

「別にそんなにカツ『よくないから』

バレた。

カツコよく言ったのがバレた。

「で、その前にお前誰だよ」

「アンタ知らん相手にタメ口？他の先輩やつたら怒られてんで。ウチやから良いものの」「あれ？先輩だったの？さすがにそれはヤバイな。

「すみませんでした。貴方はどなたでしょうか？」

「ウチはアンタと同じクラスの舞島舞<sup>まいしままい</sup>」

「とりあえず、俺の敬語を返しやがれ」

「アンタが勝手に先輩だと勘違いしたんやろ」

「あの言い方は誰だつて先輩だと思つわ！！」

「で、自分の名前はなんなん？」

「俺の名前は、天空陸<sup>あまやぢりく</sup>」

「まあ、同じクラスやし知つとるけどな。てか、同じクラスやねん

からウチの名前も知つとけや」

「じゃあ、言わすなよ……」

「念のためや。てか、天やのに陸かいな。どっちやねん」

なんか、関西弁に慣れていないからなのか、だんだんイラライラしてきた。

「で、最初なんて言つたつけ?…ああ、桜は切ないとかなんとか」

「そう。桜つて切ないやろ?」

「そつか? 桜つて始まりつてイメージがあるけどな。入学式とか

「よう考えてみいや。桜つて夏の暑い時から冬の寒さに耐えて、やつと咲いたと思つたら雨や風ですぐに散る。なんか別れのイメージがウチには強いねん」

まあ、人それぞれの感じ方があるし、それを否定できる人間なんていないよ。

「ま、こんな話をしたところでやけどな。とりあえず、どれだけ高校生活を楽しめかや」

「いきなりなんだよ」

「人生は続くが、青春は続かないのやで」

人生は続くが、青春は続かない。

その後葉に、納得する俺がいた。

002

その後、ギリギリ5時間目に間に合った俺達は授業を受けた。いやーこのポカポカ感は嫌がらせかと思つたぜ。

6時間目も過ぎ、放課後になり帰ろうとした時

「陸一帰ろっ

女の子の声がした。

女の子に下の名前を呼ばれるなんて。

よひこそ俺の青春！！

そう思いながら振り返った瞬間、立っていたのは舞島だった。

「お前かよ！？」

「ウチで悪かつたな

「てか、やけに馴れ馴れしいな

「人懐っこいつて言つてほしこもんやな

「で、なんで俺なんだよ。舞島だつて他に友達がいるだろ」

「そひ、少しへりこは話したことあるけど、まだそこまでね

「ふーん。まあ、ここや。わざと帰るや

「お、おひ

学校を出た俺達は昼休みに見た桜並木を通りていた。

「やつこいや、舞島って関西弁だけど関西出身なわけ？」

「うそ。中学まで大阪において高校からいりやねん」

「引っ越しして来たのか？」

「ちやうよ。両親は大阪でウチはいりで一人暮らし」

「マジで！？うわあ、羨ましい」

「一人暮らしも結構大変やねんで」

「全部一人でしないといけないからな。舞島も大変だな」

「呼び方やけど舞でええよ」

「へいへい」

適当に答えたが、実は心がバクバクしていた。  
だって、女の子と下の名前で呼び合いつんだぜ？  
なんだよこのシチュエーション。

「そうこや、陸の家っこの辺なん？」

「若干離れてるけど、そんなに遠くはない」

「じゃあ、この街案内してや。まだ、あんましわからへんじ」

「別に構わないけど」

「じゃあ、行こう。…そりやなんか腹減ったな。なんか奢れや」

「それが人にモノを頼む態度か！…てか、なんで俺が奢らないといけねえんだよ！…！」

「ほり、こんな可愛くてピチピチのっことヒートができるんやで」

「ああ、こくな…女子高齢者の略な」

「お前ホンマシバくぞ」

昼休みにドロップキック食らわしたの誰だよ。  
まあ、でもこいつが可愛いと言つのは認める。  
しかも、冗談抜きでレベルは結構高い。  
レベル6ぐらいだ。

つて誰もこのネタわかんねえか。

その後、腹が減ったといつ舞をマック、ミスド、サーティワン、スタバに連れて行つた。

「……………食つてばっかじやねえか！…！」

「ふえ？」

「しかも全部俺の奢りで！…春が来たとこなのに俺の財布は今、冬を迎えたよ！…！」

「別に上手くないから」

「それに、どんだけ食つんだよお前は……女子ってあれじやねえのか? ダイエットしてるから控えなきゃとかじやねえの! ?」

「ああ、ウチ食べても太らん体质やからもうこの全然気にせえへんねん」

人に奢らす性格のやつに太らない体质はダメだろ神様……。

「まあ、いいや。とりあえず、適当に案内したけど他に見たことないんのか?」

「うーん……大きい本屋さんとかあんの?」

「ああ、あるよ」

「じゃあ、そこ教えて」

「もしかして、お前性格に似合わず本が好きなのか?」

「ほお、どうも東京湾に沈められたいみたいやな」

「すみませんでした……」

「冗談や冗談。確かにこの性格なら誰われてもしゃべりつけやしないからな。どう考へても本なんて合わなきゃいやもんな」

「どんな本読むんだ?」

「こうじろ読むで。お堅い本から漫画、ラノベまで」

「へえ。漫画とかラノベは俺も読んだりするなあ

「ううなん！？ウチ化物語めっちゃ好きやねん」

「俺もかなり好き」

「あの掛け合いがたまらんわ」

化物語ネタで盛り上がってしまったせいか本屋にはすぐに着いた感じがした。

「いいだ」

「まあまあの大きさやな

「まあまあって俺はだいぶ大きいと思つていろいろんだが

大きさはスーパーが1件入りそつなぐらいの広さである。

「ウチいつも2階まである本屋行つてたからちちゅく感じるわ

「2階建てだと…？」

「まあ、地下1階があるから2階建てになるんかなあれば

「地下だと…？」

「リアクション大きいな。芸人なれるんぢゃつか？」

「そりやでかくなるだろ。地下1階から2階まである本屋なら聞い

た」と云ふ。それでまやか梅田とかいふといふあるあの本屋か!

גַּעֲמָנִים

「都会っ子かよー！」

「ふふふ、ミス都会っ子と呼びなさい」

失敗の方のミス?」

「お前明日学校行つたら覚えてろよ。お前のスリッパをヌーサンみたいに下の部分だけにしといたるからな」

「やめてーーー！学校の普通のスリッパだからくつつかないからーーー！」

「履く時にアロンアルファ塗つてから履いたらええやん」

備の足とアリッバの下の部分が秒単位で同化していくよ!!!」

「ええせん！！！」驚く形體省にて

そのおまわりに出でんたかの潔足も同然だよ!! 家に上かれねえよ

「仕方ないやん。そういう運命なんやから」

「知ってるか？運命は自分の手で変えることができるんだぜ」

「アタシ。アレヤハ？」

「すみませんでした！！僕が悪かつたです！！」

その瞬間、頭を下げ謝罪する男子高校生がいた。  
ていうか俺だつた。

「仕方ないな。アロンアルファを使わん手を考えたるわ

「あーるえー？スリッパの上半分の切断は変わらないのでせうか！  
？」

「んーやつやな……今日の夕食は、なんか美味しいもの食べたいな  
あ

「食べればいいじゃん。一人暮らししなんだから自分で決めるだろ  
かなあ」

「……あの～それってまさか」

「やのまさかです」

「本気で言つてるんですか舞島さん……」

「うん……」

そんな…そんな屈託のない笑顔で酷いことを叫ばないでトドケ。

「わかったよ……もう、好きなもの食いやがれ……」

自棄になる俺であった。

てか、今思つたんだけど知り合つたばかりなのに何故かそんな気がしないんだよなあ。

接しやすい」というか気が合ひとこりか、まあ、わかつた」とほっこつの罠はブラックホールだといふことだ。

003

その後、しばらぐフランクした俺達はフードマレスに入ることにした。

「やつこやつさなんか失礼なことを言われた気がする」

「えー?」

「お前わざわざなんか失礼な」と思つたやうに。

「べ、別にこいつの罠はブラックホールとか思つてないし」

「全部言つてしまつてますよ兄さん」

「しまつたーークソつ俺が罠に引つ掛かるとは……やが世界一の詐欺師

「誰が詐欺師やーー」

「まあまあ、そんな怒るなつて詐欺島

「詐欺島やのうと舞島やーーだいたい、罠なんかかけてへんやんけ。陸が勝手に喋り始めてんや」

「悪い悪い。嘔みました」

「ここや、わざとやーーー。」

「嘔みましたーーー。」

「キモッ……男が言つたらなんか気持ち悪い」

「そんなストレートに言わないでくれる?俺の心は氷の心なんだよ」

「溶けて無くなるねんな。それを言つたやつたらガラスやろ」

「いやー わすがにガラスの弱さまではいかないから」

「いや、氷の方が弱いやろ。溶ける」

「ああ、だから俺つて夏が苦手なんだ」

「それは関係ないやろ」

「え? だつて夏になつたら体から水滴が出てへるんだが?」

「それを汗と言つんだよ天空君」

「なるほどー…………つてなんだよ」の馬鹿な会話はーーー。」

「お前が言つ出したんやろーーー。」

「いやいや、成績優秀クールでナイスガイな俺がそんなこと言つはずないだろ」

「…………」

「いやあ――！そんな冷めた目で見ないで……なんかゾクゾクする……！」

「ドミか――！」

「え？ ドミカ？」

「ビームかつて言つたんや――！」

「なんだ、 そうだったのか。 ビックリしたぜ。 なんでいきなり元巨人の愛称マルちゃんでお馴染みの大砲の国籍を言つのかと思つたよ

「なんでそこでいちじちマルちゃん出て来るねん――！ストレートでミニカって言えや――！」

「おー？ 野球だけにストレートでえですか？」

「お前ホンマ一回黙れ――！」

「一旦、 落ち着いた俺達は店員を呼び、 注文をした。

「あーまだなんも考えてへんなあ。 陸はなんか入るん？」

「俺も何も考へてない。 たぶん、 入らないかなあ

「やつなんや。じゃあ、ウチも入らんとこかなあ」

「じゃあってなんだよ」

「いや、せひ、陸と一緒に行動してた方が楽しいと思つて、それにえ?まさか、この雰囲気は告白とこいつですか?ついでに、俺にも青い春が来るのか!?

「それにて、美味しいもん食べさせてくれるしーー!」

「期待した俺が間違つていたよ」

「はあ?期待つてなんやねん…ははあん、それはウチが告白でもするかと思つたんやな?」

「うぬせえーー完全にそんな雰囲気だつたじゃねえかーー!」

「まあまあ。そんな風に見てくれてるんは嬉しいで」

「はいはー。さようですか

「今のでウチはさらに上機嫌になつたわーーよつしゃ、なんか好きなもの追加してええよ」

「マジでーー?……つて支払つのは俺だよーー!」

「あ、バレた?」

「危なくもつ少しで自分の首を締めるとこだつたよ

「こへりでやからひて死ひませんでも。一歩間違つたら窒息死するで」

「せうこつ意味で言つたんじやねえよーー。」

「まあまあ、こへり陸がドミで変態氣質やからひてウチは見放したりせんから」

「勝手に話を進めんじやねえーー。」

「やうこや、陸つて彼女おんの?..」

「いたひせつきみたいに期待しねえよ」

「ふ~ん」

「お前は?..」

「ウチもおりさんよ」

「好きなタイプは?..」

「成績優秀、運動神経抜群のイケメン」

「完璧人間じやねえか!..」

「冗談や。そんなやつねつたら逆にウチから願い下げやわ。ねむれないし」

「まあ、お前の彼氏になるやつはお金を持つてゐるやつじゃなことな

「なんで？」

「食費がかかる」

「別にウチそんなんに食べんかったも大丈夫やで」

「美味しきものを食べさせりつゝにひじやねえか。わつわふたいに」

「別に外食やなくとも作ってくれたらそれが美味しいもんやし」

「……騙されたあーーえ?何?食いに行かせろつて意味じやなかつたのー?」

「うそ」

「もう泣いてもよひしきじょつか?」

「恥ずかしいからやめて」

「それはやうと俺達の学校つてバイトの所だつたつけ」

「うそ。良かつたはずやで」

「なんかしようかなあ」

「ウチもやうつかなあ。仕送りしてもう分減らすためにも

「へえ。なかなか良ことあるじやん」

「ウチはこれでも地元でまええ子で通つてんねんで」

「へえ

「陸みたいにH口本や▲▽を買つためだけにバイトをするんじやな  
こいつで」とせ

「勝手に理由を決めんなやーー。」

「え? センジやなかつたん?」

「違ひつけーー断じて違ひつけーー。」

「ヒーヒー、これからも一つも買わんといふやな

「それば……あ……あれだ」

「[冗談]や[冗談]。逆に思春期のこの時期に興味なこやつの方がいいと  
かしこむわ

それからも話は続き、気が付けば2時間が経過していた。

「やるやう行くか?

「やるやな

支払いを済ませ外に出た。

今日一日でじんだけお金を使つただよ。

「じゃあ、ウチにひきこまか

「送つて行くよ。暗いし」

「別にええって。大丈夫やから

「夜道を女の子一人で帰らすなんて俺のプライドが許せねえ……」

「そんな決め顔で言われても……まあ、じゃあお願いするわ」

「おつ

それから舞を家まで送つて行つた。

「ありがとう……！ 今日ばかりはおつかれさま

「どういたしましてー」

「やつ。陸の連絡先教えて

「ああ、そういうやうにや教えてなかつたな」

そしてようやくアドレスを交換した。  
女の子のアドレスゲットーー！！

「んじゃ、またな

「おつ

その後、俺は帰宅した。

## 第1話・学校の屋上に行つたら空からパラシュートを背負つたメガネの少女が

「どうでしたか？」

安定のグダグダ感を感じて頂けたでしょうか？

てか「ハイツらむうすぐわき合ひの？」聞くな

まあ、書いてる本人ですらわからない展開ですが良かつたら次も読んで下さい m(—\_—)m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3997ba/>

とある男子高校生と女子高生の日常

2012年1月10日16時52分発行